

# いもう 葦毛通信



ハルリンドウ

2026年4月23日  
豊橋市文化財センター  
豊橋市松葉町三丁目1  
TEL: 0532-56-6060

No. 184

## 1、ハルリンドウが盗られました！

葦毛湿原のハルリンドウは 2013 年1月から開始した大規模植生回復作業により順調に開花数が増え、2015 年は 2,000 輪でしたが、2026 年には 15,296 輪（過去最高記録）まで7倍以上に増えました。

しかし、今年4月12日にハルリンドウが盗まれていることが判明しました。特に今回は大変珍しい**白色花のハルリンドウ**が狙われました。白色花のハルリンドウは4月6日には4輪咲いていたことを確認していましたが、このうちの3輪が盗られました。盗掘穴は5か所で確認でき、通常の青色花のハルリンドウを含め少なくとも5株以上が盗まれたようです。

葦毛湿原では毎年同じ場所に白色花のハルリンドウが見られ、皆さんが楽しみにしていました。今回は種子を残すこともなく掘り盗られてしまいましたので、来年も白色花のハルリンドウが見られるのか、大変心配なところです。

今回の件は4月14日に豊橋警察署に被害届（犯罪事件受理番号: 703号）を提出し、葦毛湿原は国指定天然記念物なので、文化庁あてに毀損届も提出しました。また、現地には今回の経緯を記載した注意看板を設置しました。この件について、**ハルリンドウの盗掘を見た、白いハルリンドウを持っている人がいる**等の情報をお持ちの方は豊橋市文化財センター（0532-56-6060）、までお知らせください。

葦毛湿原は皆さんの大切な共有の財産です。個人的な楽しみのために大切な花を持ち帰るのは恥ずべき行為です。このような行為は絶対にやめてください。



盗まれた白色花のハルリンドウ



盗掘穴：3か所（2026年4月13日）

## 2、2025年度作業報告－3(希少植物の蒔き出し実験)

葦毛湿原では絶滅しそうになっている植物であるウメバチソウ、ホソバリンドウ、コオニユリの人工授粉を続けてきました。これらの植物は個体数が極端に減って絶滅寸前の状態です。葦毛湿原では国や県によって絶滅危惧種に指定された植物を対象にするのではなく、葦毛湿原で現在絶滅の危機にある植物を対象にして、絶滅しないような様々な対策を行っています。

その対策の中でも、人工授粉は有効な方法であると考えています。人工授粉は個体数が極端に減ってしまった植物に対して行っており、遺伝的多様性を保つために行っているものです。極端に数が減ってしまうと遠く離れたところにある個体同士の受粉はうまくいかなくなってしまいます。本来は花粉を運ぶポリネーターに任せることが自然なのかもしれませんが、これは偶然に任せることになり、必ずしも遺伝的多様性が確保できているかは分かりません。

そこで、あまりにも個体数が少なくなってしまった種の遺伝的多様性を保つためには、トキの人工増殖で行われているように人間が交配を管理して遺伝的多様性を保つ必要があります。そのために、葦毛湿原では少なくなった個体間でまんべんなく花粉が受粉し、遺伝的多様性が保てるように人工授粉を行っています。

しかし、このように計画的な受粉を行って周囲を除草して発芽の条件を整えたつもりでしたが個体数はなかなか増えませんでした。そこで、2025年度から種子を人工的に蒔き出して発芽の状態を確認する取り組みを始めました。

植物の絶滅を回避するためには、開花→結実→種子散布→発芽→成長→開花のサイクルが回っていく必要があります。このサイクルを自然に回るようにしなければ、絶滅を回避したとは言えません。葦毛湿原ではこのサイクルの再生のために様々な実験を行っています。単に個体数が増えたとしてもこのサイクルが再生できなければ、絶滅を回避したことにはなりません。

### 1) ウメバチソウ蒔き出し実験区

ウメバチソウは2025年に3年ぶりに開花が確認できました(葦毛通信 No.179・182 参照)。今回は2か所(U-1・2)に種子の蒔き出しを行いました。U-1(下左写真)は開花が確認できたO地点のすぐ脇に設定しました。50cm四方で除草して裸地化し、四方に園芸用の細いポールを立てました。自生地点は実験区右側50cmほどのところでした。種子は長さ0.8mmほどであまりにも小さく軽いので、雨で流れてしまうかもしれません。



ウメバチソウ：U-1(2026年3月26日) U-2(B地点：2026年3月26日)

## 2) コオニユリ蒔き出し実験区

コオニユリについては、かつて自生していた地点4か所（K-1～4）に種子の蒔き出しを行いました。

K-1（下左写真）は2022年まで開花が確認できたY地点に設定しました。50cm四方で除草して裸地化し、四方に園芸用の細いポールを立てました。ここでは2022年に3個体のコオニユリがあり開花が確認されていました。しかし、このうちの2個体が盗まれてしまい、この時も警察に盗難届を提出しました。これ以後、ここではコオニユリは発芽しなくなり絶滅状態で、コシダが優勢になっていました。今回実験区はコシダの根を除去し裸地化しました。

K-2（下右写真）は2022年まで開花が確認できたO地点北側に設定しました。50cm四方で除草して裸地化し、四方に園芸用の細いポールを立てました。ここでも2022年以後コオニユリの開花は確認されていません。



コオニユリ：K-1（Y地点） 2026年3月26日 K-2（O地点）



コオニユリ：K-3（L地点） 2026年3月26日 K-4（O地点）

K-3・4地点（上写真）は、かつてコオニユリがあったとされているところに実験区を設定しました。50cm四方で除草して裸地化し、四方に園芸用の細いポールを立てました。実験区ではネザサやコシダの根を除去して裸地化しました。

コオニユリはこれまでの観察で複数の自生地点が離れており、受粉がうまくいっていませんでしたが、人工授粉を行うとほとんど結実することが確認できています。種子散布も自然状態で順調に行われていると判断できましたが、発芽せず絶滅した地点が複数あり新たに発芽してくる地点があまり確認できませんでした。このままでは、自生地点と個体数が減り続けることになるので、人工的な種子散布を行い自生地点の再生を行うことにしました。

### 3) ホソバリンドウ蒔き出し実験区

ホソバリンドウも2か所(H-1・2)に種子の蒔き出しを行いました。H-1(下左写真)は最も多く17個体が自生している地点(I地点東側)の中に設定しました。区画している木の枝の間を除草して裸地化し、木の枝で囲いました。画面中央の裸地の部分で大きさは100cm×70cmほどです。周りの区画はホソバリンドウが自生しているところで除草していない4か所の区画です。

H-2はJ地点南側の自生しているところの脇に設定しました(下写真右)。実験地は50cm四方で除草して裸地化し、四方に園芸用の細いポールを立てました。自生地点は実験区右側50cmほどのところで、2個体のみが確認されています。ここにはI地点東(H-1)で採取した種子を蒔き出しました。異なった地点の個体の種子を入れて受粉が自然状態でうまくいくように考えた処置です。



ホソバリンドウ：H-1 (I地点東) 2026年3月26日 H-2 (J地点南)

### 4) 人工授粉と遺伝的多様性

ホソバリンドウでは種子の採取に際して種子散布状態を確認しましたが、一部の種子で散布されていない種子が見られました。果実の先端が開かず、そのまま枯れている状態でした。自然状態で散布したものは果実の先端だけがわずかに開いていました。これは強風の時に果実が揺れなければ種子が出ない構造であり、先端から出た種子が遠くまで運ばれることを期待した種子散布の方法だと思われます。果実が完全に開いてしまえば、種子のほとんどはその下に散布されることになり、遠くまで運ばれることはありません。

自然状態で種子散布しないのはウメバチソウと三太郎池湿地のミコシギクでも確認されており、まだ原因は分かりませんが、遺伝的多様性がなくなって近交弱勢になり、不具合が生じているのかもしれません。

受粉をポリネーターに委ねるのは自然なことであり、本来の姿だと思います。しかし、これは受粉を偶然に任せるということと同じで、個体数が極端に減ってしまった種に関しては遺伝的多様性が確保できるように配慮して、人工的に受粉を行う必要があると思います。このように遺伝的多様性を考慮した計画的な人工授粉を続ければ、わずかに残った遺伝的多様性が人工交配によって再生され、多様性が増す可能性も考えられます。葦毛湿原ではこのようなことも期待して人工授粉を続けています。

トキの人工増殖は自然交配に任せず、人間が管理して交配を行って成功しています。植物は動物よりも管理しやすく特別な施設も必要なく行うことができます。葦毛湿原で行っている遺伝的多様性を考慮した人工授粉による取り組みは、どこでもできる方法であり、絶滅しそうになっている植物を救うためにすぐに行える方法だと思います。